

第5回 雲南市総合計画策定委員会 議事録

1. 開催概要

日 時 令和5年9月1日（金）13：30～16：30

会 場 雲南市役所 5階 全員協議会室

参加者 委員16名、若手WG9名、事務局5名、事業者2名

【委員（◎委員長、○副委員長）】

（順不同、敬称略）

区 分	氏 名	所 属 団 体 等	備 考
地域自主組織から推薦された者	加藤 一郎	大東町地域連絡協議会	欠席
	広野 充明	加茂まちづくり協議会	
	陶山 桂一	木次町地域連絡協議会	
	菅澤 邦次	三刀屋町地域連絡協議会	
	○大家 崇	吉田町地域連絡協議会	
	徳島 義孝	掛合町地域連絡会議	
公募により選出する者	總山 萌	公募委員	
	森 浩子	公募委員	欠席
	藤原 美紗	公募委員	欠席
その他市長が必要と認める者	小林 慎一	JAしまね雲南地区本部 営農企画課長	
	◎高橋 大輔	(株)出雲たかはし 代表取締役社長	
	松尾 まゆみ	雲南市観光協会 副会長	
	大森 伸一	雲南市立木次小学校 校長	
	藤原 ひろみ	雲南市社会福祉協議会	
	舟木 千恵	キラキラ雲南	
	田中 学	合同会社 GIFT 代表	
	木村 和子	うんなんコミュニティ財団	
	梶谷 知世	島根大学 大学生	欠席
	田中 輝美	島根県立大学 地域政策学部 准教授	
	山元 圭太	雲南市地方創生アドバイザー	

【若手ワーキングチーム名簿】

所 属	職 名	氏 名	備考
防災部	くらし安全室	佐々木 良	欠席
市民環境部	環境政策課	須谷 大輔	
	税務課	加藤 千佳	
健康福祉部	保健医療介護連携室	村尾 奈津子	
子ども政策局	子ども政策課	難波 真美	
農林振興部	林業振興課	佐藤 健太	
産業観光部	観光振興課	安部 千愛	
建設部	都市計画課	持田 琢也	
	災害復興チーム	神田 敬太	欠席
加茂総合センター	自治振興課	中林 英昭	欠席
木次総合センター	自治振興課	三浦 美穂	
掛合総合センター	市民サポート課	武田 章	

【執行部・事務局】

所 属	職名	氏名	備考
雲南市	副市長	吉山 治	
政策企画部	部 長	板持 周治	
政策企画部 政策推進課	課 長	鳥谷 健二	
政策企画部 政策推進課	統括主幹	山本 亮	
政策企画部 政策推進課	主 幹	武田 堅治	

【調査委託会社】

所 属	氏名
(株)エブリプラン	肥後、鶴見

2. 議事次第

- 1) 開会
- 2) 議事
 - ・これまでの策定委員会の振り返り
 - ・第1次～第2次総合計画期間中の取り組みの共有
 - ・基本構想の検討
 - ① 基本構想について
 - ② 人口ビジョンについて
 - ・その他
 - ① 令和5年度施策評価結果について
- 3) 閉会

3. 配布資料

次第

第3次雲南市総合計画（基本構想）策定の流れ・スケジュール【資料①】

第3次雲南市総合計画 基本構想／人口ビジョンの方向性について【資料②】

令和5年度 施策評価結果

4. 議事録

1) 開会

吉山副市長及び高橋委員長より挨拶を行った。内容は以下の通り。

発言者	要旨
吉山副市長	今回は第5回目ということで本格的な総合計画案の議論が始まる。これまで現地視察や見分を広げる会をやりながら今日に至った。議会の中でも策定委員会の動きを報告している。これまで第1次、第2次と重ねてきたが、この人口減少時代にあって、第3次総合計画は人口減少対策、国を挙げての総合戦略も兼ねている大変重要な計画。人口減少は止まらず少子化も進んでいる。昨今の物価高騰など状況は厳しくなっているが、その中で雲南市が今後も持続可能な、市民一人ひとりが安心して豊かに楽しく暮らせる地域社会にするにはどうしたらいいかを議論していくことになる。ただ、この計画が10年先を見てどんな生き残り戦略を作っていくのかを考えたとき、少子高齢化がさらに進んで、10年先の地域の状況を想像したときに、周りで一緒にやっている仲間が高齢化して、果たして10年後同じことができるのかということを感じることが多くなり、いろんな市民と話をすると危機感が一層増している感じがする。これを乗り越えて

	<p>いくためには節約をしたり我慢することもあるが、一方で人間社会、地域社会なので、この先楽しく確実に残っていくための、明るい希望や未来が必要になってくる。厳しい中ではあるが、AI や DX などの技術革新が進んでいるので、工夫をすればいろんな可能性が生まれるということも感じている。また、雲南市は来年でできて 20 年になる。雲南市も合併で生まれた市だが、当時既に人口減少や財政危機があった。6 町村で議論をし、生き残っていくために選択した結果が合併だった。その時の一つの理念として、一つの市になっても、地域ごとの良さを残しながら、これを強みに、自立していける地域社会を作っていこうということで雲南市は誕生した。地域自主組織、かつての旧小学校区単位が自治の基本だが、これが今でも根付いている部分と、高齢化が進んで課題になっている部分がある。おそらく全国で見たときに、最後には地域が「残る」という自立の気概を持つことが大きな強みであり覚悟であるので、これを大事にしながら、後は応援団を作ることや技術革新を活用すればまだまだチャンスが開けてくる。今回、皆さんにも 10 年先を見た議論で、雲南市にできることをご提言いただきたい。私たちも 2014 年から総合戦略に取り組んできて、いろんな取組、失敗をしてきているが、市は行政のプロという立場として提案もしながら、戦略、次の具体の施策につなげたい。10 年後にこういう姿で雲南市は残っていきたい、そういうものを共有する、後は決まればそれを着実に実行していく、そういう構図で第 3 次総合計画を作っていただければと思う。今日はその初回の議論。活発な意見交換をお願いしたい。</p>
高橋委員長	<p>5/28 に策定委員会が始まってから 4 回、3 分の 1 が進んでいるが、これまではインプットが多かった。今日からが重要なアウトプットになるので、活発な議論ができればと思う。私自身、6 月から体重が 10 キロ減った。総合計画も、わかりやすく、見た目にも変わったといえるようなものを皆さんと作っていききたい。</p>

2) 議事

進行：雲南市地方創生アドバイザー 山元圭太 氏

- ・これまでの策定委員会の振り返り

事務局より説明を行ったのち、グループに分かれて振り返りを行った。内容は以下の通り。

発言者	要旨
事務局（鳥谷課長）	<p>これまでインプットを中心にやってきたが、今日から 11 月まで基本構想の素案を検討していく。今回のワークショップでは基本構想、人口ビジョンについて話す。基本構想を考えていく上で、これまでの第 1 次計画、第</p>

	<p>2次計画でどんな議論が行われ、まちづくりが行われてきたのかも触れたい。これまでの議論をまとめたものを皆さんに提示するので、そこにさらに意見を追加していただく。次はそれをたたき台として提示するのでもう少し深めていただくというのが次の10月の委員会。10/21には市民の皆さんとワークショップを開催し、これまでのたたき台を提示し、意見をいただく。それを踏まえて、11/17には基本構想の素案を提示して皆さんにまた意見をいただき、素案としてまとめていく。12月議会にこれを提出し、説明する。</p>
山元氏	<p>来年6月の議会で議決というのが最終。その前の3月の議会で提案を出し、その前の12月の議会で基本構想の素案を提出するところまでがマイルストーン。そのためにあと3回アウトプットする機会が設けられている。その1回目が今日。ここまでインプット期として過ごしてきたが、この期間でどのようなことがあったか振り返りをする。</p>
事務局(山本統括主幹)	<p>(資料 p2) 5月に龍谷大学の深尾副学長に基調講演を行っていただいた。人口減少していく中でこれまで通りのやり方ではうまくいかないモデルなき時代に入っていく。AI やコロナによって幸せの形や価値観が大きく変化していく。これからの社会は目指したい未来を描くことが重要。そのためには発想の転換をしていかないと世の中は変わっていかない。トークセッションでは、政策を作るプロセスを、パートナーシップをデザインする機会に。これまでの考えにこだわっていると見えなくなることもあるので、アンラーン的な発想をするのも重要。チャレンジとは違う視点も重要。</p> <p>(資料 p3) 2回目の策定委員会では市内視察を行った。様々な分野の人が地域づくりに関わっていることがよくわかった、のびのびと生き活きと活動されている人々の力が100%発揮できる基盤になりうる計画であるべき、自分達のライフプランや将来像を考えることが総合計画に繋がる、身の丈に合ったことをとにかくやって行くという姿勢はとても大切、などの感想があった。</p> <p>(資料 p4) 3回目、まちづくりワークショップでは、Creative Project Base 代表の倉成さんを招き、Slido を使用し様々なワードを出すというワークショップを行った。印象的なワードとしては「たばこすーだわね」や、「挑戦二割たばこ八割」などのスローライフのような、ブレーキをかけたことをやっていこうということ、「えすこに」や「がっしょに」などみんなが協働してやっていくというキーワードが印象に残った。</p> <p>(資料 p5) 4回目は西粟倉村に視察に行った。共感・共有を生むためには「シンボルプロジェクト」を定め、目指すものを示すことが重要。民間企業の力を積極的に活用し、連携して取り組むことが重要であり、地域内の</p>

	<p>経済循環を生み出すことを大切に活動していた。そのためには国が次に何を するのか、流れを読み、お金が入る時期に積極的にやっていくべきだと あった。</p> <p>(資料 p6) 視察後の振り返りワークショップを行った。地域ビジョンと してえすこに繋ぐ、次世代に繋ぐ、総働してやっていく、という意見が出 た。また、シンボルプロジェクトについては、次代の子どもに受け渡せる 「人づくりプロジェクト」をやってはどうか、自然の恵みを再認識し、多 文化、多様性を持ったプロジェクトをしてはどうか、地域内でお金を回し ていくバランスのとれたプロジェクトにしてはどうか、という意見があっ た。</p> <p>(資料 p7) 最後にこれまでの総括。キックオフフォーラムで学んだこと は、これまでの「人口増を前提とする社会」と、これからの「人口減少社 会」は違う。幸せのかたち、価値観の変化が起こっている。豊かな環境、 資源がある雲南にはチャンス。市民協働の深化（市民との対話プロセスの デザイン、関係人口の拡大）を図っていく必要がある。2つ目に、策定委 員会での意見としては、挑戦より、みんなで、楽しみながら、幸せに、え すこ（いい具合に）というマインドが重要。市全体で共有できるシンプル でわかりやすいビジョンを策定していくべき。教育、経済循環、自治、自 給、総働、生物多様性などのキーワードが出た。市議会では、人口減少が 進む中では、行政施策の効率化（合理的な見直し）も必要。地域の人権対 策、集落対策、道路や除雪など身近な生活課題への対応が重要という意見 があった。</p>
山元氏	<p>ここまでの振り返りを聞いて、現状の所感や印象に残っていることなどを グループで話してもらいたい。</p>
<p>グループでの振り返り（5分）</p>	

・第1次～第2次総合計画期間中の取り組みの共有

政策企画部板持部長及び政策推進課鳥谷課長より説明を行ったのち、グループに分かれ
 て感想共有を行った。内容は以下の通り。

発言者	要旨
山元氏	<p>雲南市の特徴として、市民協働あるいは自治をどうしていくかというこ と、現行の総合計画にあるチャレンジなどをどう扱っていくかというのも 出てきている。これらをさらに深めていく際に、これはどういう文脈で、 どういう検討がなされ、どういった当時の人達の願いが込められ今に至っ ているのかを知ってから、それを踏まえて今後どうするか検討していくの が、より深みが出て良いだろうとアドバイスをいただいた。ここからは1</p>

	<p>次・2次の総合計画はどのように作ったのかを教えてください。</p>
<p>政策企画部 板持部長</p>	<p>政策企画部に合併の時からいるという立場もあるので、これまでの振り返りをしたい。どんなまちづくりが大切かということ念頭において進めてきたのかという観点で話していきたい。</p> <p>合併してまず注意してきたのは2つ。1つは協働ということ、市民の皆さんが主役となる町を作っていこうという考えは最初からあった。もう1つは、雲南市に求心力がなかなか働かないので、いかにして市に一体感を持たせるかというところに腐心したのが第1期。その考え方の根底にあったのは、これからは市民の皆さんが主役だということは欠かせないということ。協働が不可欠だということ。協働を進めようと思うと、主体となる方々が活躍できる状態でないといけないので、市民力、住民自治が重要というのが根底にあった。</p> <p>合併協議会の中で、住民自治、産業振興、教育、公共交通のプロジェクトチームを立ち上げて、中でもコミュニティと住民自治のプロジェクトというのが合併協議会でできた。最初に描いた考え方が、まず協働を基本にしようということで、市民参画でまちづくり基本条例を作ろうということになったので、合併して少ししてから市民委員会を立ち上げ、条例化したのは年数が経ってから。基本的な考え方として、自分たちが住む地域は自分たちで知恵を出して、汗をかきながらみんなで作ってあげていこうと。他人ごとのまちではなく自分たちが主役となって参画もできるようなまちというのが基本的な考え方だった。そのために、コミュニティの地縁性と、まちづくりグループやNPOの活発化という志縁性の2つを軸にした。そのほかに、地域委員会というものを作った。合併するとまち単位のまちづくりが疎かになるのではないかと懸念があったため、まちの単位のまちづくりを進めていくための市民委員会ということで発足した。これは8年間で廃止している。これをまとめた報告書の中に、基礎的な自治会の運営が困難になってきている、担い手不足である、若年層の参加が減少傾向にある、女性が参加しにくい・発言しにくい雰囲気がある、自治会未加入世帯が増えているという課題があり、これらの対策として、自治会の機能を補完するための新たな自治組織を作ることがベースとなって地域自主組織というのでできている。もう1つ、地域の主体に基づく組織化。自分たちで作るものにしていこうということがまとめられ、新市建設計画の中に考え方を盛り込んでいる。その中の柱の1番目として「市民が主役の自治のまち」を掲げ、一人ひとりが自ら考え、行動する住民自治を基本としていく、市民と行政が協働でまちづくりに取り組んでいこうとい</p>

うことを謳っている。これがベースになってまちづくりが進んでいる。細かく言うと、初期の段階で描いたのは、市、まち、各地域、この3つの機軸をベースにしている。合併するまでは自治会ベースだったのが、コミュニティを強化して新しく組織化をし、総合センターと地域委員会が一緒になってまちの単位で、市全体でまちづくりを進めていこうというのが描いた姿だった。地域自主組織は協働を考え方のベースとしているので、一世帯一票ではなく、一人一票制という考え方でスタートしている。市民と行政の対等性、補完性を入れている。市民の方々が出発点となり、地域でできることは地域でしていき、それを支える市、県、国があると。市民一人ひとりのために地域の皆さんも活動していくという考え。協働の8原則も当時定めており、相互理解・相互補完、対話と対等、目標と取り組む過程の共有、自主・自立といった8項目の原則を基軸としてまちづくりがスタートしている。

地域委員会は途中でなくなった。平成24年に検証をし、地域委員から意見を聞いたり、活動実績の分析や市議会から意見を求めた結果、地域自主組織という新たなコミュニティをベースにした方が良いのではという結論になったので、8年間で廃止をしている。通常であれば10年間は継続するものだが、地域自主組織というものができて5、6年後ほどで各コミュニティが活発になってきたので、まちの単位にこだわらず各地域単位でまちづくりを活発にしていくと、地域委員会として想定していた機能も十分やっていけるという判断で発展的に解消とした。

市の一体感とまちの単位との関係性を平成24年当時考察したが、雲南市の一体感は合併直後に比べると進展している。市の一体感の醸成と反比例してまちの単位の求心力は低下するのではないかという懸念もあったが、中学校区単位が町名としてなくなることはないだろうと。あるいは商工会など団体の支部の名前は残るので、まちの単位のまちづくりを進めようとしてそうするよりも、市全体で何かをしようと思うと広すぎて、それぞれの支部を設けるということが起きているので、市の求心力は高まったとしても、まちの求心力は低くなるとは考えにくいのではないかと。まちの単位のまちづくりを狙いとしなくても良いだろうという整理をしている。

日本の自治機構の変遷を紐解くと、明治22年に市制町村制が施行され、法律に基づかない自然に出来た村が7万余りあったそうだが、これが1/5程度になり、憲法が施行され、昭和の大合併があり、基礎自治体が1/3の3,200程度になった。その後平成の大合併があり、さらに半数近くの1,741まで減った。効率化していくためにも合併を繰り返してきたが、それでも変わらない拠り所とは何だろうと当時思っていて、それはまちの単位への

こだわりではなく、昔からある村の単位ではないかということで、今の地域自主組織の単位を重視してまちづくりを進めてきたという経緯がある。もう1つ押さえておきたいのが、全国的にコンパクトシティとしてのまちづくりと多極分散型のまちづくりの両極端のまちづくりがある。

コンパクトシティの例として、富山市が駅の周辺に人口を寄せてコストを効率化していくまちづくりをしている。雲南市みたいに緑が豊かで森林や川があるという部分でいくと、人の利便性だけを考えたらコンパクトシティが確かに有効だろうが、残されたところの農地や山をないがしろにして良いのか。多極分散型だと住民が主役となり、人と人との絆に加えて人と自然が共生しているような社会ということで描いているので、雲南市は多極分散型でいこうと当時描いている。これからの議論の論点になると思うが、周辺部とまち部をどう捉えるかということは大きなテーマ。今までこういう考えがあったということを念頭に置いてもらって、議論いただければと思う。

まちづくり基本条例は平成20年3月に議決された。合併から約4年後に施行されたが、なぜ時間がかかったのかということ、市民委員会での提言によって条例化をしているので、話し合いの期間の時間がかかったため。この条例は自治体の憲法といわれており、最高規範性を持つと条文で明文化している。その目的は協働のまちづくりと置いているので、雲南市のまちづくりの基本は協働のまちづくりということが言える。また、育てる条例という項目も入れており、作ったら終わりではなく状況によって変えていくというものにしている。市民、議会、行政の三者の構造の中で、それぞれの権利、役割と責務を入れていて、市民参画を進めるということや、コミュニティ活動の推進、交流と連携という項目も入れている。これは今後の人口ビジョンの議論に影響があるのではないかと思うが、これからのまちづくりをどのように描くかによって条例の中身も変化していくべきという考え方。まずは市民の方々がつくり育てる条例となっているので、今回の議論で改善点があれば条例改正も視野に入ってくるのではないかと思う。

これまでを振り返ると第1次、初期の10年間というのは協働の基盤を確立する期間だったと思う。そのために地域自主組織という仕組みを作った。これが協働のまちづくり1.0。第2次では、チャレンジの連鎖というのが加わってきている。なぜこれが始まったかということ、まちづくりの主役というのが市民の皆さんだけでなく、関係する方々、企業の皆さんだとして、社会課題の解決ということで活動されている。協働という観点からすると企業の皆さんも一緒になってまちづくりを進めていくということで

	<p>チャレンジの連鎖と言っている。もう1つは世代間。子どもも大人も参画しようということでチャレンジの連鎖と入れているのが第2次、協働のまちづくり2.0。</p> <p>これからの第3次で皆様に描いていただく部分が、協働という考え方をベースにした場合どういうふうに進展させていけばいいのか議論していただきたい。</p>
<p>政策推進課 鳥谷課長</p>	<p>チャレンジの始まりについて触れさせてもらう。先ほどあったように、もっと多様な多世代の人たちに協働の輪に加わってもらおうというのが基本にあった。第2次計画の議論の中で盛り込んできた。論点になったのが人口の問題。段々人口が減ってくるのがわかっていたが、策定委員会の中で、人口が減るのを指をくわえて見ているだけではなく、そこに挑戦をしていくということが大事だという議論があり、第2次総合計画の基本構想の中に「人口の社会増への挑戦」というのが入ってきている。加えて、国でも、東京一極集中ではなく、人の流れを地方に変えていく地方創生が始まったので、そのための総合戦略もちょうど同じタイミングになったので、雲南市の第2次計画は、総合計画と総合戦略を一体化して人口社会増に向かっていくということも計画に盛り込んでいる。その中で単に定住基盤だけ整えて、人をとにかく増やせばいいということではなく、まちを魅力化する人をしっかり育て、確保していく。協働という、地域自主組織の基盤ができてきたので、そこと繋がって人材をどんどん生み出していく。ある意味ここをチャレンジとして地域課題の解決に向けて取り組んでいく人材を育てていくということになった。そういう意味では、我々の中では次の10年の概ね3段階に分けて進んできているが、1つ目が、地域の課題を子どもも含めて解決していく、乗り越えていくということを経営計画に盛り込んだ。最初の計画はこういうかたちで進んでいて、子どもたちをキャリア教育の中で、地域に出かけ、地域の課題に向き合って実践していく動きを作っていくというのを、小中高のプロジェクトの1つとしてやっていくということ。高校を卒業して皆県外へ行ってしまいが、進学した大学生も地域のフィールドで受け入れて雲南市が学びの場を提供していく。そうして育った人たちが地域の中の課題解決をビジネスとして回していけるような人材をしっかりと育てていくというのがこのプロジェクトの3番。そしてこれが産業にも繋がっていく。そしてこういうチャレンジはどんどん呼び込んで来ようという点。そして最後は地域自主組織の、住民主体の地域づくりに繋がっていくという点。こういったことを最初の計画の中では盛り込んで進んできている。しかし、人が減ってくると、人材を育てていく、人材の中でも地域社会を動かしていくような意味変人</p>

	<p>のような、もっと尖った人材を作っていく必要があるということが次の段階として議論してきたこと。そういう中でスペシャルチャレンジ制度というのが立ち上がって今年で5年になる。たくさん子どもたちや大学生、若者の実践が生まれてきている。その時同時にできたのがチャレンジの歯車を戻さない。これは議会からもそういう言葉をいただいて、チャレンジ、スペシャルチャレンジという制度を作るのなら、条例としてこれを基にやっていくんだという覚悟を示しなさいということがあったので、全国で初めて市民のチャレンジを応援する条例を2019年4月に制定している。子どもから大人まで地域の課題解決や新たな価値の創造を積極的に雲南市は進めていきますと。これをチャレンジと称して、市内外からチャレンジへの参画を進め、雲南市は課題に立ち向かっていくというのが前文に書かれている。市民の権利としては当然チャレンジをする権利がある。そして市長の責務として入れているのが、チャレンジを理解して応援するということ。</p> <p>最後、いろんなチャレンジを生み出してきているので、これがお互い育ち合うような生態系を作っていく。そこまでくると持続性が出てくるのではないかということで取り組みを進めている。</p> <p>子どもも若者も大人も企業も、お互いの領域を超えて、地域の色々な所でチャレンジが起きて地域の課題を解決していく。こういった10年後の姿を描きながら取り組みが進んできている。</p>
山元氏	<p>ここまで聞いていて自分も知らないこともあった。第1次、第2次、合併以降、雲南市役所としてはどういうまちづくりをしてきたのかということをお話してもらった。皆さんの所感について、グループでの感想共有を行いたい。</p>
グループでの感想共有（10分）	

・基本構想の検討

事務局より基本構想の構成、基本理念の検討、まちづくりの将来像（10年後のめざす姿）の検討に関する説明を行ったのち、グループに分かれてワークを行い、全体共有を行った。

また、事務局より人口ビジョンに関する説明を行ったのち、グループに分かれてワークを行った。内容は以下の通り。

① 基本構想の構成、基本理念の検討、まちづくりの将来像（10年後のめざす姿）

発言者	要旨
山元氏	<p>ここからは具体的な基本構想の中身の検討に入っていければと思う。皆さんと12月の議会に向けて素案を作っていく訳だが、そこで作っていく基本構想とは何なのか、何を議論していかないといけないのかといったこと</p>

	<p>のアウトラインをご説明いただきたい。</p>
<p>事務局（鳥谷課長）</p>	<p>（資料 p8）基本構想の構成について、今考えているたたき台を載せている。まず基本構想として、このまちの将来目標、必要なまちづくりの取り組みや基本方針を掲げていくことになる。方針の所を見ていただきたいが、皆さんからの議論に基づくまちづくりの計画自体は、やはり市民が手に取り読みたくなるものが良いのではないかと思う。今までは行政の職員がこれを参考にしてまちづくりを進めていたが、そうではなくて先程の協働を進めていくにあたって市民の皆さんが行動するきっかけになるものが良いのではないかと方針案では掲げている。具体的な項目としては、これまでとこれからや大事な基本理念や目指す姿、人口ビジョンといったものをここでは挙げています。今回はまず基本構想を描いていただくことになるが、その下には基本計画があり、この基本構想をどう実現していくのか、その為の具体的な施策や事業を基本計画の中に落とし込んでいく。これからの議論で基本構想が固まってくると、市役所の方で、これを実現していくための施策や事業を組んでいくので、それをまた皆さんにお示しして、ご意見をいただきたい。それから実施計画というのは、毎年どのような事業をやっていくのか。これは財政計画も連動してくるので、毎年行政の方で定めていくものとなる。</p> <p>（資料 p9）この基本構想について少し見直しをしていきたい点を挙げています。1つはまちづくりの将来像についてです。今までは基本理念を基に分野ごとに5つの将来像が決まっている。この形だと5つの将来像があって、全体として雲南市が10年後どういった姿になっていたら良いのかが少し見えづらいということがこれまでもあった。基本構想が目指す将来像というのを一本化して、もう少し10年後の姿を分かりやすく描いた方が良いのではと思う。これには図やイラストなどを用いながら、市民の皆さんに分かりやすいように提示していくのが良いのではないかと。</p> <p>2つ目は、分野ごとにはと言っても、目標を定める必要があるため、基本的には分野ごとに実現するための基本目標を設定して、それを達成する為の施策を基本計画の中で施策という形で作っていきたい。また皆さんにもお示しのご意見をいただきたい。意図としては先程申し上げた通りで、市民計画にすべきだと皆さんからたくさん意見をいただいた。そしてまずはビジョンをしっかりと共有していくこと。これは西粟倉でも学びになったが、そういう意味ではビジョンを共有していくことを優先する為にも10年後の姿を描いた方が良いと意見があったので、今回このような形でやらせていただきたいと事務局では考えている。</p>

山元氏	<p>少し確認だが、これが現行の総合計画の基本構想の構成になっている。基本理念と書いてある部分が、これまではビジョンやコンセプトといろいろな言い方をしていたが、もともとの雲南市の計画だと基本理念という言葉を使っているので、このままこれを使ってお話ししていかれたらと思う。現行の総合計画はどちらかと言えば行政側のまちづくりを示した計画であるといった色合いが強い。今回は準備段階から委員長、副委員長の言葉にも繰り返しあるが、行政の計画から市民の計画に大きくスイッチを切ったものにした方が良い。だからこそビジュアル化または文言も含めて皆さんに伝わりやすいものをアウトプットとして目指した方が良い。その結果、今の市の提案として基本理念は基本理念として言葉を載せよう。今からこの中身をどのように更新していくかの議論が出来ればと思っている。</p> <p>2つ目の提案としては、これまでは分野ごとの将来像という名前だったが、これが行政計画であり、こちらに落とし込む為にはこういう括り方をして出すということが分かりやすかったのでそうになっているが、一個ずらしてこの間に基本理念を具体的に分かりやすく示したビジョンを1枚作ろう。基本理念はコンセプトなので、これに基づいて具体的にはどういうまちなのか考えてみよう。今考えているのは、基本理念をどういった文言にするのか。その文言に肉付けをしていくと具体的にどういうビジョンを1枚もので描いていくのか。このあたりについて議論していただきたい。</p>
徳島委員	<p>これまでの構想は良かったが、そのことを市民の皆さんが全く知らなかったし、今日参加された方の中にも知らない人がいた。もしこれをされた時、一番前提となるのはどういった見せ方をするのかだと思う。ある程度イメージしていただいた上でこういった構想をやっていただいた方が良いのでは。見せ方が分からないのに、見せるものだけの議論は少し大変かなと思った。</p>
山元氏	<p>作ったものをこれまでの反省を踏まえて、どのように市民に周知、広報していくのかと言った質問である。</p>
事務局（鳥谷課長）	<p>非常に大事な部分だと思っている。今回、最初にお配りしたスケジュールの中にも3月の時点で、これからこういった素案が出来てくると1月に市民の皆さんにお話をし、ご意見をいただく場を設けたり、3月の時点で一応の原案ができると、これを周知するイベント等を行いたいと思っている。まだ具体的なことは決まっていないが、しっかりと市民周知していきたい。6月議会で議決をいただいたら、更にその後もこれを周知するための取り組みを行っていきたいと思っている。特に策定委員におかれては、そこへの協力だったり、アイデアをいただくことを来年度はそういったことが中心となってくるかなと思っている。そのあたりもご意見とし</p>

	て踏まえてこれからも進めていきたい。
山元氏	<p>今のご提案、ご質問に関して私もすごく大事なことだと思う。考え方としては、今ここでどういう広報媒体でやるかというところまではなかなかこの建付けだと難しいかなと思う。後程これが採択されたら、これをどう今までと違った形で本当の意味で市民の計画にするためにどういう広報をしていくのかを議題として決めていけると、今までとは違った動きが作れるのではないかと思った。今後重要議題として挙げていけると良い。</p> <p>ここからの時間は、まず基本理念に当たる部分を一度言語化していただきたい。検討していただくための材料としては、事務局でこれまで出てきた言葉をグルーピング化したものがあり、出た意見で支持が多かったキーワードを挙げている。これだけに捉われる必要はないが、第1次、第2次のまちづくりの経緯も聞いていただいた上で、第3次の総合基本計画の基本理念としてどういった文言を紡ぎだしていくと良さそうか等をグループで検討していただきたい。粗削りで結構なので、文言を紙に書いていただきたい。</p>
グループワーク（20分）	
山元氏	時間が足りないと思うが、現時点での素材を出していただきたい。
B 若手WT 安部	<p>1つ目：みんなで考えましょう。地域を愛する、地域を思う人を育てる、新しい人や意見を受け入れるような雲南市</p> <p>2つ目：みんな仲良く平和に暮らす</p> <p>3つ目：豊かに美しく</p> <p>いろいろと意見が出たが、「みんな仲良く平和に暮らす」が一番芯の部分で、これまで総合計画を作ってきたが、芯の部分はやはり変わらない。ただそれをどういう言葉で表すのかは今3つ作ったのでまた見ていただきたい。</p>
A 田中委員	今まではどちらかというと目標メーターがあったので、ふわっとしているがみんなが共感できていた。例えば海士町の「ないものはない」や「幸運なんです。雲南です。」も素晴らしいと思うが、「なんか〇〇」、「なんか幸せ」みたいな端的なキャッチコピーでかつイメージしやすいワードはどうかと最終的にまとまった。
C 若手WT 持田	みんなを思い、てごするまち。現代で疲れている人も多い中、挑戦2割たばこ8割、みんながやりたいことをサポートしたり、支えていきたいといった意見があった。そういった中で相手を思う言葉、心を忘れずみんなで支え合えるようなまちが良いのかなと思った。
E 高橋委員長	楽しいを価値に変えるまち。楽しいところに人、物、金、情報全てが集まってくる。そこに価値が生まれてくるよう、そういったものに変化してい

	くとか。これの他に楽しいを繋げていくまちとかの案も出た。この中でビジネスの要素をあんに伝えられたらいいなと思った。
D 徳島委員	いろいろなことを皆さんにお知らせする時に、幅広い参加者に分かりやすい言葉、かつ字は大きめ。説明はあまりなくて良いので、一言や二言で伝わることをした方が良いのではないかと思う。いろいろなテーマで見ると難しすぎるので暮らしと直結するテーマでこういうことをしたらどうかとやれば、説明会に来た人も共感が湧くのではないかと考えた。
(休憩)	
山元氏	(資料 p11)ここからは、まちづくりの将来像について考えてみたい。「今から 10 年後の雲南市とは、一体どういうことが起こっている集合体なのか」を表現していく。言葉というより概念図、ポンチ絵を作ってみてもらえればと思う。たとえば現在でいうと、「チャレンジが育ち合う生態系を育むまち」、「チャレンジに優しいまち雲南」、じゃあそれって何なのかというと、子ども、若者、大人、企業チャレンジが数年前からスタートして、これらのチャレンジを応援するためにお金や人や情報や、その人たちが繋がる場づくりが、チャレンジャーを支える 4 つの環境として用意されている。これらが有機的に繋がって、真ん中にはスペシャルチャレンジという制度を利用してチャレンジャーの特待生をまち全体で応援していますと、これが「チャレンジに優しいまち雲南」です、という話。では今回、第 3 次総合計画で先ほど皆さんに出してもらったことを具体的に言うとうような集合体のまちなのか、概念図を書いてみるということをやっていたらと思う。素材についてはこれまで議論してきたものをまとめてもらっている。視察の振り返りの後のワークショップで出てきたのが、教育や次世代に受け継ぐ・引き渡す・繋げるという話や、2 に経済循環があり、3 にチャレンジがあった。今ほど前端的に打ち出すほどではないが、これまでのチャレンジを進化させていく必要はあるよねという話もあった。4 つ目に自治・協働を進化させていくという話もあったり、5 つ目に食やエネルギー、地産地消ということも話されていた。生物多様性であるとか。こういうことがこういう感じで組み合わせられているのが、「〇〇なまち」「みんなが楽しく平和なまち」みたいなものを、素材にも組み合わせ描いてみてもらえればと思う。新しいものを付け加えていただいて構わない。
グループワーク (20 分)	
山元氏	共有を簡単にしていきたい。
A 大家副委員長	真ん中に前段のキャッチコピーを入れた。「なんか〇〇」短くて何かすんと落ちるようなワードを中心に、それにまつわるいろんなことを周りに

	<p>付け加えていく。仮に「なんか幸せ」とし、メンバーのそれぞれが考える幸せについて入れている。楽しい、チャレンジ、助け合い、チャレンジをして失敗してもそれを受け入れたり見守ってあげたり、助け合ったり手を取り合ったりといった優しい共同体。そういうことが幸せの周りにあること。具体的には温泉や散歩、ゆったりした時間や豊かな自然などがある。そういうものが周りにあって市民が幸せだと感じてもらえるような図を作った。</p>
B 若手 WT 須谷	<p>人の一生を中心に考えてみた。赤ちゃんは元気になる、笑顔があふれる子どもたち、中高生になって悩みが出てくる中で、悩みを人に話せる環境を作っていけばいいのではないかと。大学進学や社会人になる中で、地元でいきいきとやりたい仕事ができる環境が楽しく豊かで平和な生活に繋がるのではないかと思う。老後に自分の時間ができてからは、趣味とか自分のために使える環境づくりが地域の中でできるべきではないか。昨今、独居老人や外に出ない人もいる中で、そういう方の地域でできる仕組みを作ると。健康に長生きしてピンピンコロリという人生を過ごせるような地域づくりに積極的に関わっていくという話をしていた。</p>
C 小林委員	<p>てごするまちの「てご」に焦点を絞って、どんなてごが良いか考えた。教育に関わる子育てや送迎、農地関係では草刈りや田畑の管理、地域行事では祭りやスポーツ指導、災害時、介護などのてごをしてほしいということが出た。てごは一方通行だと引け目に感じてしまうので、てごが行き交い、地域で循環する形になるといいという話をした。</p>
E 高橋委員長	<p>楽しさを価値に変えるまちというところから考えた。楽しいといってもボヤッとしているので、まず楽しいを見つける。例えば農業体験、草刈りなど楽しくないと思っていそうなものを楽しさに交換していくというのをツーリズムとしてやっていく。楽しいチャレンジ「たのチャレ」をやっていく。ものばかりではなく、この人に会いたい、この人って楽しい、人も金が集まるのが楽しさで見た時に、この場所でこの人がこんなことをやっている、楽しい人に会いたい、楽しいことをしたい、楽しいものをつくりたい、楽しいと認められるというのが良いかと思う。健康にも楽しいという気持ちが良い効果に繋げることができるのではないかと、最近では少子高齢化というのもあるが、子どもよりもペットが全国的に多くなっているので、ペットにも優しい町にもしていく。ペットフードやドッグランなどを作って楽しそうだなと思われるようなまちにしていくと良いのではないかという意見だった。</p>
D 徳島委員	<p>共通テーマとしては「喜びの繋がり」。まず、学校関係では幼稚園から高校まで一貫した教育が一番助かっているという話がある。掛合も加茂も中</p>

	<p>学校までずっと同じなので市内のどこかの学校へ行くことができれば、ちょっと喜びが出るのではないかと。経済関係では、良いものを作っても隣近所に売ることはできない。そういったときに商工会やネット販売などの環境を作っていくと良いものがなかなか売れないのではないかと。ものを作ってネット関係とリンクさせていくといったイメージ。学校については西粟倉に行った時も、小さな子どもたちが楽しくネットをしていたので、そういったことも繋がっていかねばいけないのではないかと。生産者、ものを作って掛合分校がお米を作ってブランド品として売っているが、それも暮らし関係のものが全部リンクしている。みんなが喜んでやることによって繋がりができて、自らやることによって喜びができる活動が繋がっていかねばいいかなと思う。</p>
山元氏	<p>現時点での我々が出せる基本理念とビジョンを出してみた。これまでの議論を含め、出てくるべき材料は出てきたと思う。あとは組み上げてみるということなので、ここからは次回の 10/13 までに、事務局で仮組みをする。文言案とビジュアルの概念図案を何パターンか出してみて、それ自体を皆さんにお返しし、そこに対して修正をかけていくということを次回行いたい。</p>

② 人口ビジョン

山元氏	<p>人口ビジョンの戦略・方向性について皆さんにご意見をいただきたい。副市長からも話があったが、今後 10 年の雲南市を考えた時に、人口ビジョンをどの方向にもっていくべきかと思うというのが悩ましい。総合計画の中にはそれも加味しないといけないので、人口ビジョンということをもどのように考えていくといいか、皆さんの意見をいただきたい。</p>
事務局(鳥谷課長)	<p>人口ビジョンについて、現状どうなっているかというところ、この緑色のラインが第 2 次計画のラインになっている。元々はもう少し高い位置にあったが、国勢調査の結果を踏まえて見直して少し下げているのがこの緑色のライン。令和 6 年の目標値が 33,800 人になっているがこの数字も、少し下げながらも、これまでの成り行きよりも増やそう、転出を抑制しよう、合計特殊出生率 2.07 という目標を掲げてこの状態になっている。下がりながらも安定化させていくということ意識した雲南市の将来人口が現状。現状の達成状況になるが、対策(1)20~30 代の男女の転入を 1.2 倍に増やすということについては、令和 3 年、4 年を見ていただくと 0.79 と 0.74 ということで、これは未達なのでなかなか厳しい状況。対策(2)20~30 代の女性の県外への転出抑制については、0.72 と 0.90 で、これは 2 年間達成しているという状況。その下が 20~30 代男女の県内転出の抑制につい</p>

ては、0.99 でこれまでと変わらない状態で維持されている。対策(3)合計特殊出生率については、現状 1.43 で、目標値には程遠い。今年状況を見ても産まれてくる子どもの数はなかなか増えない。

(資料 p14) これまでの総括。1つ目、子育て世代の松江市、出雲市への転出抑制について、これは子育て施策についてだが、ここの制度は雲南市は充実しており、満足度も 80%を超えるくらい高い。実際に子育て環境や教育環境が魅力的で転入してくる方がいる。むしろこれをもっと発信していくことが課題。「住宅」は大きな転出要因となっており、近年改善傾向が、大きな課題。実は空き家が増えてきているという課題が大きく、新たな住宅団地への市内転居も課題のひとつとしてある。最も多いのが「結婚」を理由とする社会減が大きい。理由として「しがらみがない」が一定数出てきていることから、地域の人権意識を高めていくことや、スポーツ・文化の振興など若者や女性がいきいきと心豊かに暮らすということが何なのか、環境づくりが1つのテーマである。2つ目、大学進学・就職を理由とする県外転出への対応について、高校3年生にアンケートをとると、将来の雲南市に貢献したいとの回答が約7割、一方で、現実的には5割を超える卒業生が県外へ進学する。そのうち7割は県外で就職する傾向にあり課題。人材還流を起こしていくというのが対策の急務。市内就業対策として、高校との連携をしっかりとっていく。また、デジタル人材の育成ということで新しい働き方がどんどん出てきているので、雲南にいながら働く場を作っていくということを取り組んでいく必要がある。また、県外にいる学生や若者が雲南市に関わる活動が生まれているので、コミュニティづくりをしっかりと進め、将来的なUターンに繋げていく。3つ目、結婚・出産・子育て支援の充実について、出生数が年間200人を割っている状態が続いている。今年もその可能性が高いので、力を入れていかないといけない。

(資料 p16) 既存の戦略から見える傾向について、現在の第2次計画の人口を増やしていく基本的なロジックは、住宅を増やしていくということと雇用を増やしていくということが掲げられている。住宅団地を作り、企業誘致をして雇用を生むことを掲げているが、実際は住宅の住宅着工数というのは目標達成しており、雇用の場所もあるが、実際に社会増ができていくかというところでできていない。ここのミスマッチが課題。

(資料 p17) 実際に移住された方にヒアリングをしたが、皆さんからは住宅の質を求める部分があった。例えば単なる公営住宅だとここにきて暮らすという価値が感じられないということ、災害リスクを考えると、今の場所だと住みづらいという声もあった。また、子どもの数も教育関係の中で

	<p>は結構あった。住宅の量よりは質を求める声が多かった。</p> <p>(資料 p18) 定住人口のみでまちを維持していくのには限界があって、既にいろんな先進地でも、関係人口の方々が地域の復活を支えていくということが実態として出てきている。関係人口がどういう定義でいくのかは議論が必要だが、住民票の数プラス、ここに関わっていただく人をもう少し増やしていくということと、新しいテクノロジー、たとえば草刈りロボットなどを入れていくことも地域を維持していく考え方の中では必要だと思う。</p> <p>(資料 p19) 人口ビジョンの方針パターンを3つ出している。皆さんに感想や意見をいただきたい。まず1つ目はこれまで通り人口減少に歯止めをかけていくということ。定住対策をしっかりとやって人の数も増やしていく。2つ目は人口減少を前提としてそこに適応していくための計画、人が減った中でどう地域を維持していくか考えていくというのが2つ目の方針パターン。3つ目は地域を維持していくためには一定の人口が必要なので、それを人口の数ではなく「質」を重視する。人口回復と書いてあるが、ここは「人材」をしっかり確保していく。これが今までのチャレンジの動きの中、人材づくりをしっかりやってきた雲南市の強みが活かせるのではないかと考えている。この3つのパターンを考えている。</p> <p>(資料 p20) 事務局としてイメージを持っているのは、人口減少を前提としながらも地域の維持が重要なので、そこが可能な人口目標を設定するのが大事ではないかと。地域が維持されていくということはどう考えるかということだが、事務局案としては学びや教育の環境が地域に残っていることが大事ではないかと。そういう部分からすると「子どもの数」というのを目標値にして、そこを起点に目標人口を考えてみてはどうかというのが議論となっている。それだけだと地域の維持に必要な活動量というのが保てない可能性がある中で、そこは関係人口等で補っていくというのが考え方としてはあると思う。</p>
グループワーク (7分)	
山元氏	幾つか出た意見を言っていたらと思う。
A 総山委員	この方針パターンはどれも必要で、その中でも優先順位をつけると良いのではないかという話になり、田中学さんと大家さんは2→1→3の順番ではないかと言っておられた。2→3→1ではない理由として、人口減少は仕方がないし、予測はついていますが、それでも歯止めをかけようとするのが重要で、そこに優先順位をつけて取り組むことがあっても良いのではという意見があった。
D 若手 WT	3つの方針パターンの中だと、3よりの2。人口減少はどうしてもきてし

佐藤	まうので、その中で関係人口等を増やしたり、個人事業主が活躍できるような産業分野の構造を進めていきたい。
C 陶山委員	この人口減少に関して、数字を出したときに子や孫の世代に対して誰が責任をとるのか。もちろん努力もしないといけませんが、最悪を想定すべきではないか。これは私1人の意見。
E 松尾委員	雲南市は田舎でアットホームな感じもあるので、あまり増えすぎると田舎の良さがなくなってくるのではないかと。皆が兄弟のようにずっと同じメンバーではなくて、親同士もほのぼのとできるような少人数の学校の良さは残していきたい。しかし子どもの人数が地域で1、2人になってしまうのも困るので、その辺は歯止めをかけるような政策をとってほしい。
事務局（鳥谷課長）	人口ビジョンについては、まだ庁舎内でもこれから議論していくので、皆さんのご意見を参考にさせていただき、まとめていきたい。進捗状況についてはまたお伝えする。

・その他

事務局より令和5年度施策評価結果について意見提供への依頼があった。

3) 閉会

閉会にあたり大家副委員長より挨拶を行った。内容は以下の通り。

発言者	要旨
大家副委員長	今までいろいろと雲南市の現状などを見させていただき、いよいよどういった雲南市にしていくかというアウトプットの作業に入った。既に出てきたワード、「楽しい」「つながる」「助け合い」など、既に皆さんの中に答えはあるんだろうと思うが、それをいかに分かりやすい言葉で表現していくのか。私もずっと雲南市民だが、若い時に少し上の先輩にやってもらったことを今度は後輩に返すような年になってきた。その先輩の子どもに私は何をしてやれるか、その繰り返しで良い循環ができれば、一定数は雲南市に帰ってきたい、住みたいと思う。くれるようなビジョンを出せたら良いと思う。

以上